オリ主ガチャ

もぬ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お、おい、ハメルン、だっけ!?　あいつを倒すにはどうしたらいいんだ!?

『オリ主ガチャ』を回して彼らの力を借りるハメ。オリ主たちを強く育てて、この町を救うハメ～

目次

1. なんとかの呼吸 ―――― 1
2. 魔法少女リリカルなのは～任意のなんかかっこいいサブタイトル～ 25
3. I am the boon of my sood. ―――― 44
4. ランニング・デュエル！ 62
5. シリーズもの ―――― 84

1. なんとかの呼吸

放課後。

人気のあまりない旧校舎、文芸部室のドアを開けると、今日もそこには先客がいた。

「……。ちわっす！　先輩」

あいさつをかます。先輩は、視線を本から上げて、分厚い眼鏡越しにこちらを認めて、

「ああ。こんにちは」

とだけ言って、再び本に目を落とした。

うーんクールだ。クールビューティーだ。この先輩、性格はクラスにひとりはいる本好きの地味っ子って感じだけど、しかし漫画の登場人物かよってくらい顔がいいので、惚れてしまう。綺麗な長い黒髪と、雪のように白い肌。現代のやまとなでしこである。好き。

まあもうフラれたんだけど。

……俺の放課後時間つぶしスポットのひとつであるこの部室が、この先輩に乗っ取られてから、もう一か月くらい。出会って初日で告白してフラれるという失敗ファーストコンタクトのせいか、俺たちの間にあんまり会話はない。

とはいえ、彼女は黙々と本を読んでいるだけで、こちらを嫌がる様子でもない。それをいいことに俺は、彼女の存在が充満している部屋の空気を胸いっぱいに吸うべく、近頃はここに足しげく通っているわけである。

荷物を放り出して、椅子に腰掛ける。

暇つぶしのために図書館で見繕ってきた本を読む……前に、ついでにパチってきた今日の新聞を広げる。

地元に関するニュースの、ひときわ目立つ見出しに視線が引かれた。

「……ん？　この店……」

おととい未明、大型書店が、店内を何者かに荒らされ、重い被害を受けた。

朝、従業員が出勤すると、陳列されている書物の多くが、見るも無残に引き裂かれていたのだという。人的被害はないが、犯人は捕まっていない。現在捜索中とのこと。

……くだんの本屋さんは、学校、そして自分の家からそう遠くない。マンガやらラノベやら買うときによく寄る店だ。

けが人などは出ていないとはいえ、けっこう頭のヤバいやつがこの街にいるってことになる。

「先輩、ニュース見た？　本屋とか行くの、気を付けた方がいいかもッス」

対面に座っていた先輩に、声をかけながら紙面を見せた。

先輩は顔を上げ、眼鏡をくいっとやって紙面を眺めたあと……、
「そう、だね。……君もよく気をつけるといい。ケガをするかもしれないから」
というようなことを、細い声でたんたんと話した。
「!! う、うっす。へへ」
不意打ちを喰らって、俺はどきっとした。
あの先輩が。
こんなに長いセリフを口にしてくれた上に、しかも俺を心配してくれたような内容……!
もしかして……俺のこと好きなのか……!?
脈アリとしか思えねえ。今こそ、３５回目の告白だッ！
「せ、せんぱ……あれ？」
「……」
先輩は、ぱた、と本を閉じて、席を立った。そのまま荷物を肩にかけている。
え。まだまだ放課後はこれからだっていうのに、その帰り支度は？
「もう帰っちゃうんすか？」
「ああ。用事を思い出してしまってね」
先輩はそう言いながら、無表情でさっさと部室のドアに手をかけた。

出る間際、こちらに顔を向ける。
「では、また」
ぱたん。
彼女は、静かに出ていった。
……。
聞いた？
「では、また」だって!!　１００パー両想いじゃん。もうバラ色の学校生活しか想像できねえよ。
「……ハッ！　先輩、俺も一緒に帰りたいッス！」
彼女がいなくなった文芸部室は、あまりにがらんとしてしまっている。以前は自分の部屋のようで居心地が良かったが、もうあれには戻れない。
なので、先輩が帰るなら俺も帰る！
慌てて本を鞄にしまい、勢いよく部室のドアを開けた。
「あれ……」
割かし長い廊下なのだけど、右にも左にも、先輩の姿も影も無かった。
……とりあえず、今日の部活はこれで終わりだ。
俺はひとまず鍵を閉め、まずは正門に向かうルートで小走りを始めるのだった。

▼

結局、先輩は捕まらなかった。

くうっ。この虚しさよ。明日学校で会えるまで、俺はこの悲しみを抱えて生きねばならんのだ。

さて。まだ家に帰るには少し早い。どこかに寄り道して帰ろう。

今日は……

そうだそうだ。たしか、気になってるマンガの最新巻が今日発売じゃなかったかな。

本屋に……。

……。

事件のあった本屋は、家に帰る途中で簡単に立ち寄れる。というか通り道だ。

新聞にあった、中々に悪質なあの事件の現場は、いまどうなっているんだろうか。警察官がいっぱいなのかな。テレビのリポーターとかいたりして。

野次馬衝動がわいてきた。

いつも通り、通って帰っちゃうか。捕まっていないらしい犯人も、同じ街で二度目の犯行なんてしないだろ。たぶん。

そんなことを考えながら、しばらく帰り道を歩いた。

自分の日常にしみついた行動として、大通りを避けた人気の少ない路地を歩いてい

く。あ、そういえば危ないよな、と思った頃にはもう、例の書店がある大通りまではすぐそこだ。
いつも人がいない、小さな公園に足を踏み入れる。ここを通り抜けると近道だ。
「……すー、さ、寒っ」
自分の身体を抱いて、肩をさすさすとやる。
今日寒いな。昼はやったらめったら暑かったのに、なんでまた。
……ていうか、もうそろそろ夏じゃなかったかな。
「……あ……？」
ぽつ、と、頭になにか落ちてきた。ついで腕、鼻先。
雨だ、と思った。
でも、それはやけに熱く、肌を刺激してきて。
指で取って、良く見てみる。
それで、空を見上げてみたら……、降っていたのは、〝雪〟だった。
「おお？　ほんとかこれ」
いろいろ混乱したあと、かばんからスマホを取り出して、カメラなんぞをあちこちに向けてみる。
この季節に雪って。この地方じゃありえないだろ。すげー、ＳＮＳでバズれるかな、

ついに。
俺は録画モードにしたスマホをあちこちに向けて、雪が映える絵を探した。
そうしたら――、
「……？」
人影が、画面の中にいた。
その誰かは、くろくて、もやもやとしていて、人相がわからなかった。
画面から目を外して、現実を見る。目をこすって、その誰かをよく見ようとした。
……。
なんだ、あれ？
「……も、も、もしかして。ゆうれい……」
俺の視線の先、公園の木陰に立っていた黒い人影は、文字通り『黒い人影』だ。影が三次元の世界に出歩いている、といった印象だった。
非現実的な光景である。
「か、かえろ。あはは」
視線を逸らせずに、それを見つめながら、ひょこひょこと後ろ歩き。
影は――、
首を動かして、俺を、見た。

やばい、と思って、後ろを向いて一目散。学校の体育や運動部だったときにやったランニングのときより、呼吸も、足の回転も、うまくいなかった。

とにかく一生懸命走る。どこに向かって？　わからんけど、とりあえず大人のいるところがいい。学校だ。学校に戻ろう。そう思いながら、必死で逃げた。

「はあっ、はあっ、はっ、はっ、は、はあ、あ、アハハ……なんで？」

気が付くと自分は、また公園の中の、同じ景色をみていた。

公園の東側から出ていったはずだった。なのに、俺は今、西側にいる。まるでドラクエかファイナルファンタジーの世界地図みたいに、東と西が繋がっているみたいな。

公園に、閉じ込められた、みたいな。

「うあ……！　ひ、ひいあ……」

背中を向けて逃げたはずのソイツが、また、目の前にいた。

黒い人影が、じりじりとこちらによってくる。近づくほど、ぼやぼやとしていたシルエットが、なんとなくはっきりとしてきた。

人間の、女性のように見える。身長がそんなに高くなくて、髪が長い。

やっぱり、幽霊っていったら、髪の長い女。やばい。しぬ。

黒い女の影が、こちらに何かを向ける。手に持っていた、長い何か。

「あ！　しぬ」

その〝切っ先〟を向けられた途端、ぞっとした。
俺は。観念してしまったのか、防衛反応なのかなんなのか、怖くて、目をぎゅっとつぶってしまった。つぶりながら思考している。とにかく終わった、と。
身体が冷たくなる。幽霊の放つ冷気は、熱いと思うくらいに、冷たかった。
……くそ、なんだよ。夢かなこれ。
同じ夢だったら、こんなホラーより。
先輩とラブラブちゅっちゅする夢が見たかった――。
「見つけたハメ～～～～～」
まぶたの向こうで、何かがカッと光って。それで、俺は再び目を開ける気になった。
あと、なんか変な声がした。
「なんだ……？」
おそるおそる目を開けてみる。
周りを見てみると、ここはまだ公園。けれど、目を閉じる前にいたのとは違うエリアだった。あそことは離れた場所だ。
「どこ見てるハメ？　こっちを見るハメよ」
「ん？　オアアアアアアア!?」
俺はひっくり返った。

それで、低い位置にいたそいつと目線が合う。目の前には……ぬいぐるみ、みたいな生き物？　が、宙に浮いていたのだ。

そして、口を動かして、しゃべった。

「な、なんだおまえ……」

「ボクは創作の悪魔……じゃない、ボクの名前は、あー、ボクは『ハメルン』っていうハメ！」

「いま悪魔って言ったよね？」

外見のモチーフはネズミ、だろうか。薄目で見るとファンシーなデザインに思えるが、ちゃんと見るとなんかキモい。ぬいぐるみになりきれていない生物感がなんとなくある。

「君のような〝夢力〟の持ち主を捜していたんだハメ！　ボクの力を借りて、あいつを倒すハメ！」

「あいつって……うっ、これ！　やばい、いくぞ！」

「ハメェーーーッ!?」

急激な気温の低下を感じ、ぬいぐるみを抱えて走り出す。

ひとまず、気温があったかそうな方向に！　……わからん！　勘！

「逃げちゃダメでしょ～、あいつを倒せるのは君しかいないハメよ？」

「あ、あいつって？」
　おそらくあの黒い影の女を指して、腕の中の異常存在は語る。
「あれは〝シャドウオリ主〟ハメ。常人じゃ太刀打ちできないし、本を持ってる人間を襲うハメよ。とっても危険な存在ハメ」
「本……!?　あ、今持ってるか……」
「君が倒さないと、あいつは他にもあちこち襲うハメ。具体的には、本屋とか、蔵書の多い家とか、文芸部所属の本好きの美少女とかを襲うハメ」
「な、なんだとーっ!?」
　じゃあ戦うしかないじゃん！　クソっ！
　ブレーキをかけ、恐怖でどくどく言ってる胸を押さえ付けながら、あたりを見回す。
「ハメルン、だっけ!?　俺、選ばれし勇者とかだったりするの？　どうやったら倒せるんだ!?　ていうか、本当に怖いんだけど……」
「君が直接バトルとかする必要はないハメ。オリ主にはオリ主……」
　怪しい生物は俺の腕から出てきて、ふよふよと浮かんで言う。
「――『オリ主ガチャ』を回して、彼らの力を借りるハメ」
　真剣ぶったその声に、俺はごくりと喉をならした。
　〝オリ主〟。

自分にとっては、意味の分かる単語だった。
だが、普段そうしているように、俺はその言葉を知らないふりをして、ネズミもどきに聞き返す。
「オリ主ガチャ？」
「初回は無料で回せるハメ。色んなオリ主たちの力を借りて、この街の危機を救うハメよ！」
ぱっと怪生物が光り輝くと、同じ色の光が、俺の制服のポケットから漏れだした。
……スマホだ。それがぴかぴかと光っている。画面じゃないところも何故か光っている。
「君の名前を教えるハメ！　ボクと契約するハメよ!!」
「絶対嫌だけど……」
「ならここで死ぬがいい」
「夜見山（よみやま）　千太郎（せんたろう）です……」
「契約成立ハメ～～！」
スマホの光が収まり、画面表示が見えるようになる。
覗いてみると、見たことあるようなデザインの〝ゲーム画面〟みたいなのが映っていた。

ゲーム、といっても、スマホゲームだ。
つまり、ガチャがあるやつ。
「これか!?」
画面に表示された、1回召喚（初回無料）、と書かれているボタンをタップする。
そうすると、小さな画面が、バッテリー切れが気になるくらいまばゆく光りだし――、
「なんだ……!?」
俺達の眼前に、光る円型の紋様が現れる。一呼吸の間のあと、紋様を形作る線を経路にして、虹色の光がめぐり始めた。
「これは！　ＳＳＲの気配ハメ！　強力なバトルもの向けのオリ主が現れるハメ～！　勝ったも同然ニジね！　ファ、ファ、ファ……」
「いまスーファミのファイナルファンタジーの悪役みたいな笑い方しなかった?」
やがて、光がおさまる。
そして……そこに、立っていたのは。
「俺を召喚したのは君か？　召喚者よ」
「き、君は……!?」
体格は俺と同じくらいの少年だ。
一見して、すぐに目を奪われるほどの美少年。

しかし、異様な雰囲気の目つき。
背中から生えた片翼。肩にかついだ真っ黒な剣。
……う、うそだろ。まさか。こいつ、こいつは……！
「センタロー・エクスキューショナーだ。俺への仕事は高くつくぜ？」
――俺が前に書いた転生ものに登場させた、主人公（おれ）じゃん!?
「ぐあああああっ!!?? こ、こんなバカなことが……」
「ど、どうしたんだ召喚者？　既にダメージを負っていたのか!?　くっ。俺の仲間を傷つけるやつは、この俺が――――殺す」
「ダッシュをそんなにたくさん使うな!!　くおおお～……」
脳みそと腹の中のだいじな部分がキュンとする。
こんなこと……あってはいけない……。
「ちぇ、チェンジ。このオリ主だけはダメだ」
「なに？　なぜだ」
「こいつ強そう!!じゃんハメ？　ちょっと調べてみようか。『設定開示（ステータスオープン）』！」
「あ！　やめろ!!!!（切実）」
スキル開示レベル2：『センタロー・エクスキューショナー』
・万華鏡写輪眼：うちはイタチ級

・滅竜魔法（闇）
・特質系念能力者（能力名：???）
・身体能力：ソルジャークラス１ｓｔ級
・装備：エリュシデータ

「ぎいいいいいいいいいいいい」

突然宙に現れたウィンドウの内容を見て、地面をのたうちまわる。

もう、やめてくださいね。

「やっぱりＳＳＲハメねえ」

「がああああ。何をもってレアリティを決めてるの？　滑稽さ？」

「……。どうやら俺は、君の求めに足る人間じゃなかったようだな――すまない」

「ううううん、その優しさもつらい、お前に罪はない」

転げまわる。

そうしているうちに……、やがて肌寒さを感じて、立ち上がる。

まずい、やつだ……！

「もう一体召喚させてくれ、ハメルン！」

「無料ガチャは終わったハメよ。さらに回すには、条件があるハメ」

「条件ってなに!?」

「どんな内容でもいいから君が小説を1話分書いて、どっかに投稿すればいいハメ。それで〝ニジストーン〟を1個作れるハメよ！」
「ぐうううううう、なんだそれ」
も、もうエクスキューショナーに戦わせるしかないか!?
……クソ!!
「……ん？　いや、君は既に1話投稿してるハメね。そら、あと1回召喚していいぞ」
「なっ!!　なぜそれを……ええい！」
何故も何も目の前にいるからな！　1話投稿してぼろくそに叩かれたやつが!!
「俺を使えば片が付くのに。……頑張れよ、召喚者」
すっと消えていくエクスキューショナーを尻目に、スマホを素早く操作する。
気温が急激に下がっていく。目で見える範囲に、あの黒い女がやってきていた。
ガチャのボタンを押す。サークルが目の前に現れる。
すぐ近くまできている影が、〝レイピア〟の切っ先をこちらに向けていた。
サークルの模様を光が走る。
女の剣先が光り、なにかがこちらに飛んでくる。それは空気を凍てつかせ、氷の刃を形作り、俺を串刺しにしようと――、
「う、うわあああっ！」

きん、という音がした。
……自分をかばって縮こまるのをやめて、立ち上がる。
俺の目の前には、新しい誰かが立っていた。
氷の攻撃を弾いたその人がこちらへと振り向く。
思わず、息を呑んだ。
背は自分より少し低い。女の子だ。
長い髪の色は、白。あるいは銀。若白髪って感じじゃなくて、どうしてか、漫画のキャラみたいに似合っている。
服装は、着ているものがとにかく黒い。あと和装だ。肩から何か羽織ってる。
腰には、刀。
そして――、
顔が、死ぬほど好みだった。
「あの。私は君に召喚されたってことでいいのかな」
「はっ？　あ、は、はい」
「わかった。あいつを倒せばいいんだろう」
「え、で、でも」
少女はあちらに向き直り、髪がしゃりんと揺れた。

こんな華奢な女の子が、おっそろしい幽霊とやれるのか。え、どうしよ。なんか良い匂いする。俺女の子の背中に守られちゃっていいのかな。やばい、好きになりそう。告ろうかな。

「ッ、うおあーっ!?」

「君は離れた方がいいな」

気が付くと、彼女の肩に担がれていた。離れた所に下ろされる。

さっきまで俺達のいたところに、かちこちのつららが地面から生えてる。つららなのに地面から。あそこにいれば串刺しにされていただろう。

……黒い女の持っている武器。フェンシングに使うやつみたいな、細い剣だ。あれを振ると、つめた～い氷が出てくる仕組みらしい。

剣を注視してみると、なにかオーラのようなものが、ゆらゆらと揺れている。

「設定開示！　……どうやらあのシャドウオリ主は、〝ボンゴレファミリー・雪の守護者〟らしいハメ。雪属性の炎を使うハメね」

「なんだ雪属性の炎て」

ぜんぜん意味分からんね。雪属性なのに炎て。

「はは、雪属性の炎ね……」

とつぜん、クールに見えた少女が笑った。

そして、ぼそり、と小声で何かつぶやいた。たぶん独り言だったと思うんだけど、先輩のちっさい声を聞き逃さないように耳を鍛えた俺には、彼女がなんと言ったのかがわかった。

「私とキャラが被ってるな」

そう言いながら、少女は腰の刀を抜いた。

いよいよ、対決か……！

惚れた女の子をかっこよくかばうシチュにも憧れるが、普通に怖いから遠くから見ておこう。

ふたりの剣士は対面するやいなや、激しい剣の打ち合いを始めた。

ていうか腕の振り？　とか速すぎてよく見えなかったので、剣の打ち合いかどうかも定かではないんだけども、キンキンキンキンキンキンキン！　って聴こえるから、たぶんチャンバラしてると思う。

しばらく攻防を続けたのち、ふたりは距離をあけてにらみ合った。

……よく観察すると、黒いやつの肩が上下している。息切れしてるみたいだ。

おお！　こっちが優勢だ!!

「どうやらあっちは、恋愛重視の愛されタイプハメね。勝ちは決まったシブ。ニ～ジファッ、ファ、ファ……」

お前の邪悪な笑い方は何？
どうせマスコットキャラを演じる黒幕とかなんだろうな。今後が怖い。
「そら、互いの必殺技が出るハメ。今のうちにしっかり見るがいいハメ」
「!!」
剣士たちが剣を構える。
ぴり、と凍てついた空気の中。先に、影の女が動いた。細剣は勢いよく白い炎につつまれ、刃の軌跡を凍り付かせていく。
そして。
「雪の呼吸、弐ノ型――」
美しい少女は、白い吐息を唇から漏らす。
「〝逆さ氷柱〟」
銀閃がまたたく。
……黒い影は、やはり幽霊のように、音もなく消えていった。
▼
戦いの後。
……技の名前と地面からつららが出たみたいなエフェクトからして、マジで敵と技被りしてたなこの人。

「アカカカカッ！　これで力をひとつ取り戻せたハメ～」
全身を光らせて喜ぶ怪生物を尻目に、俺は例の美少女へと声をかけた。
「あの！　助けてくれて、ありがとうございました」
「……別にいい。そういう役割で呼ばれたみたいだし」
少女に、まずは礼を言う。厳密にはハメルンも命の恩人なので礼を言うべきなのかもしれないが、言動のすべてが怪しいのでやめておいた。
さて、気になったことをひとつ聞いてみよう。
「ところで、雪の呼吸なんて原作にありましたっけ？」
「……」
「もしかして自分で考えたんですか？　すごいですね」
「う、うるさい。それ以上言うな」
少女は、白い頬をほんのり紅くして口ごもった。
え？　なにこれ？　かわいーーーーー。俺の考えたオリ主とちがって、スペックより技で勝った感じだったから、ふつうに凄いと思ったんだが。なんか気に障ったらしい。でもかわいーーーーーー。
惚れた。
「……俺と付き合って下さい!!」

「は？」
つい、いつものやつを言ってしまった。
……あ、うわ、不誠実だな。まったく先輩という人がいながら俺ときたら……。こんなナンパだっけ俺？　うーん！　でもかわいいからつい……。先輩とこの人……選べねえ！　たぶんどっちとも両想いだと思う。
などと頭をぐちゃぐちゃにしながら、ちら、と相手の顔色をうかがう。
彼女は、なんかこう。
クールな第一印象とは違って。にまっと、妙なうすらわらいを浮かべていた。
「あー、残念でした。……オレは〝ＴＳ〟だよ。だから、男に興味ないの」
「てぃーえす……？」
そ、それって。
こんななりして、中身は俺と同じ男……ってこと？
「余計好みだ……」
「なに？」
「あ、な、名前を！　名前を教えてください！」
先のエクスなんとかみたいに、すうっと足元から消えていく少女。
彼女は消える前に、俺を見て、きれいに笑った。

「雪村あかね。以後よろしく、召喚者くん」
そうして、まるで夢であったかのように、アカネさんはこの世界から姿を消したのだった。
……。
めっちゃ好きになっちゃった。
「ハメルン」
「アルカカカカ～ッ!!　……ハメ？」
「あの人、もう一回会えるかなあ」
「一度ガチャから引いたオリ主は、スタミナを消費していつでも呼び出せるハメ」
「マジかよ！　やった!!」
小躍りする俺。
ふよふよと浮いていたナニカは、そんな俺を見て。
うっすらと、不気味な笑みを、ぬいぐるみ未満の顔に貼りつけて。にちゃ、と口を開く。
「……では、これからもシャドウ共と戦ってくれるハメね？　一緒にこの街を救うハメ」
「うん!!　いいよ!!!」
「ファ、ファ、ファ……君のような単純なガキは好きハメ～」

こうして、俺とアカネさんのひと夏の恋物語が、始まったのであった。

▼

「ヤバい！　あいつ強いぞ！　ここはアカネさんを……」
「ここは新たなオリ主を召喚するハメよ！　さあ！」
「妙にガチャ回させようとするね君！」
「そんなことないハメ～」
シャドウから隠れ、スマホをさわる。
まばゆい光と共に、新たな仲間が召喚された。
「――時空管理局・次元航行部隊所属、ナイト・テスタロッサ一等空尉だ。キミが僕を呼んだのか？」
「美少女だ！　やった！」
「なんだと!?　僕は男だッッッ」
「めんどくさい男の娘オリ主だった！」

2．　魔法少女リリカルなのは～任意のなんかかっこいいサブタイトル～

今にも襲い掛かってきそうな敵がいる前で、新たに召喚された人は、こちらにぶちぶちと食って掛かってくる。
「僕は男だッ！　次に間違えたら殺してやるぞ」
「すいませんでした！　ナイトくん！」
「ナイトさんだろ！　僕は君よりうんと年上だぞ」
め、めんどくせぇ～！　だって見た目小学生の美少女じゃん、主人公ならもっと寛容でいてくれよ。
あとで接し方を考えるとして、とりあえず今はピンチ。シャドウオリ主がそこまで来ている。俺よりずっと年下の子どもにしか見えないナイトさんだが、彼もオリ主だ。ここは戦ってもらいたい。
「ナイトさん！　あの黒いのをやっつけてほしいんです！」
「ん？　ああ、あれか。……。〝魔力〟を感じるな」
ちんちくりんのナイトさんが振り返った先にいるのは、今回の敵。若い男性の輪郭を

したシャドウだ。
　これがまあ荒々しいのなんの。手から雷をビヨビヨ出してこちらを攻撃してくる。魔法使いなのかな？　雷なんて避けられるはずないし当たったら死ぬはずなのだが、こっちをいたぶっているつもりなのか、俺には直接は当ててこない。でも、一生分の死ぬ恐怖を味わうには十分な時間だった。
「ナイトさん！　あいつひどいんすよ！　ボコボコにしちまってくれぇ！」
「三下みたいなセリフだね……。まあいい、召喚されたからには、君は僕が守るさ」
　再度顔をこっちに向け、ナイトさんは盛大なドヤ顔をした。
　かわいい。
「この空戦ＳＳＳＳＳランク魔導師の僕がな！」
「えすえすえす……すごいっすね！」
　エスエス製薬のエスカップのＣＭみたいですね！
「どこの田舎の魔法使いか知らないが、古代ベルカ式とミッドチルダ式の両方を修めたこの僕には敵うまい。本物のイカズチを見せてやる――」
　軍服っぽいデザインのバトルコスチュームに身を包んだナイトさんが、手にしていた斧のような武器をぶんと振り回す。
　その小さな身体に、紫色のスパークをまとい始めた。スーパーサイヤ人２みたいで

かっこいい。彼も雷の使い手のようだ。

……勝った！　これは勝った！

「頑張れナイトさん！」

「ライトニング5、ナイト・テスタロッサ――出るッ!!」

目にも止まらぬスピードで敵に肉迫していくナイトさん。

一瞬でも目を離せばすぐに終わってしまうだろう――閃光のごとき、稲妻のごとき戦いが、幕を開ける。

▼

「ちょうしにのってすみませんでした……」

お人形さんみたいに綺麗だった顔をボコボコに腫らし、ナイトさんは涙混じりの声を漏らした。

「いたたたたっ!!　もっと優しくしてくれよ！　治療魔法とかできないのか！」

「あーごめんなさいね」

手当をしてあげると、涙目で抗議をしてくる。顔がかわいいから許される性格をした人だなあ。かわいい。

シャドウオリ主を封鎖領域？　とかいう結界魔法？　で閉じ込めはしたものの、ナイトさんはそれはもうぼっこぼこに敗北した。エスエスエスエスランク魔導師とか

言ってたくせに。

今は手当てと作戦会議の時間。

現在俺達がいるのは、俺の住んでいる家である。両親は夫婦水入らずでの旅行中なので、この夏の間はいない。というわけで都合よく一人暮らしだ。親父は旅行に出るにあたって、「この夏の間に誰か女の子を連れ込めよ、もうこんなチャンスはないぞ」と言っていたので、彼女をつくろうと必死になっていたが、なかなかうまくいかない。

でもいいんだ。もう彼女は。

だって今のこの光景をみてごらん？

「なかなかの強敵だったようだな」

テーブルに人数分のお茶を持ってきてくれたのは、そう、俺の愛しのアカネさんだ。長い髪を後ろでまとめていて、どこから調達してきたのかわからない現代的なラフな部屋着に着替えていて……その上から、何故かエプロンをしている。彼女はお茶を運んできたお盆を抱え、そっと俺達の近くに腰を下ろした。

なんだこの格好と仕草は。どういうこと？　俺たちもう結婚したっけ。

中身が男？　だから好き。

「私が出てもいいんだが、今の状態で勝てるかどうか」

「？　今の状態……？」

「そう、そうだぞセンタロー！　力が制限されてるんじゃ、どうしようもないっての。あ、あれは僕の真の実力じゃないからな？」
　どういうことだ？　制限ってなんだ。
　と、ちょうど疑問を持ったところに、例の妖しい生き物がふよふよと現れた。
　そして俺が何か口にする前に、あちらから話しかけてくる。聞かれるのを待っていたのだろうか。
「ガチャから召喚しただけでは、オリ主たちは真の能力を発揮できないハメ。君の手で能力制限を解除する必要があるハメ」
「そうだったのか……」
　じゃあ、あのくっそ情けない負けっぷりがナイトさんのすべてじゃないんだな。口先だけのかわいさ全振りオリ主かと思ってた。
「おまえ、今失礼なこと考えなかったか？　僕のことをかわいすぎる絶世の美少女だとか思ってないだろうな？　ころすぞ」
「どうやったらみんなをパワーアップさせられるんだ？　ハメルン」
「〝エゴストーン〟を消費するハメ～」
　何それ？　召喚に使うなんとかストーンとは違うの？
「エゴストーンを使うことでオリ主のリミッターが解除されていくハメ。エゴストーン

は、君がネット上に投稿した小説に、読者からの評価やポイントがひとつ入るごとに生成できるハメ～。このとき、評価の高い低いは関係ないハメ」

「なんでそんなめんどくさい仕様なの？」

「育成要素ハメ～」

じゃあ、誰かから点数つけられる程度のものは書かないと、こちらの戦力が育たないってことか……。

別にエゴストーンがなくても、なんでもいいから1話投稿すればオリ主を一体召喚できるんだから、俺の拙い文章でも「人員増強」はなんとかできる。

だが、人数で攻めようにも、オリ主を何回も呼び出して戦わせると、何故か俺がめちゃくちゃ疲れるのだ（アカネさんは常に召喚し続けるけど）。

つまり、シャドウオリ主に勝つには、何点でもいいからポイントをもらわないといけない。

「ああ～。めんどくさい」

一人暮らしで高校生活しながらシャドウオリ主探しもして、小説書く余裕なんかあるわけね～。手に入るリソースは微々たるものになるだろう。

召喚に使う方は即使っていいとして、エゴストーンの方はよく考えて使わねば。

ちら。

「？　どうかしたか、千太郎くん」
アカネさんを最強にしたいな～～～～～～。
「さっそくエゴストーンを生成するハメ？　君の投稿作品の評価を確認しよう」
「いやだな～」
しぶしぶスマホを取り出し、自分の書いたやつの小説情報を調べてみる。
それを見た瞬間、背筋と心臓に、電流が走って、頭の毛が逆立ったような感じがした。
「……！　９点が入ってる！　なんで!?」
１０点中９点！　めっちゃ高評価じゃん！　俺の時代がついにきたのか……。
そのまま、画面をスクロールして下へ下へ。
「……!!!!」
それを見た瞬間、がんとハンマーで頭を殴られたみたいな衝撃。
「１点が２個入ってる……」
「０点も１個入ってるハメねえ。ハ～メハメハメハメｗ」
「笑うなあああああああ!!!!!!!!」
俺は泣いた。
みんなだって転生オリ主もの書いてるじゃん……！　何が違うんだ。ぐうう。センタロー・エクスキューショナーのときよりだいぶまともになっただろ！

「ぬいいいいいいい」
「大丈夫ハメ。マイナス評価だって、誰かが君の夢を読んで何かを感じた証なんだ。次に活かせばいいハメよ」
「は、ハメルン……」
「書く側の苦しみっていうのは私には分からないけど……君が夜な夜な頑張っていたあの時間は、決して無駄にはならないと思うよ」
「アカネさん……！」
「おなかすいた」
「ナイトさん!!」
　みんなが肯定してくれる……！　ひた隠しにしていた趣味だから、こんなのは初めてだ。
　もうちょっと頑張れる気がする！
「へへ。あ、感想来てる！　読もうかな」
　通知をぴっとタップ。顔も知らぬ読者からのコメントに、心を弾ませて、目を通す。

　アルカディアス◆ｎａｋｈ２ｏ３　２０２１年７月２０日（火）
　駄作者乙。夏休みキッズかな？ｗ　二度と書くなカス

「二度と書かん」
「まあまあまあ、誰だって最初の出来はこんなもんハメ。君はまだ初心者なんだから、気にすることないハメ～」
しばらくふて寝するべく、リビングのソファに寝転がった。
このシャドウオリ主との戦い（あと読者との戦い）、身体も心も疲れる。
▼
意識が戻ってきて、しばらくもぞもぞと身じろぎする。
「あ、こら。くすぐったいだろ」
頭の上に声が降ってきて、ぱちと目を開けた。
……最初に入ってきた光景は。アニメから飛び出してきたみたいな美少女が、じっとこっちを覗き込んでいる、というものだった。
夢かな？
いや。
このやわらかい枕、まさか……。
「ウオオオオアアアーーー!?」
「あぶね」

「な、なにこれ……ご褒美!?」
思わず飛び起きて、頭の中を整理するべく、ソファに座るアカネさんの全身を舐めまわすように眺める。
ま、まさか、あのショーパンから伸びる白くてむっちりとしたふとももで……！
「あ、視線キモいなぁ。嫌いになりそー」
雪の妖精みたいな容姿で、にやっと俗っぽく笑い、アカネさんは愉快そうにしている。
「ああ、枕がないみたいだったからさ。……男はこういうの好きでしょ？　いいリアクションをありがとう」
「け、結婚してください」
「お断りだ。それより、夕飯をつくってみたよ。食べるだろ、千太郎くん」
「え……？　もう結婚していた……？」
それからしばらくして。
いつもひとりで囲んでいた食卓を、3人と1匹で囲む。友達を自分の家に呼んだときの晩飯……みたいな、わくわくした気分だった。
とはいえ、会話の内容は、主に例のシャドウをどう倒しに行くか。
「とりあえず、エゴストーンで制限を解除して……、それで再戦かなあっ味噌汁うまい」
「ふふ、ありがとう。現代日本の炊事場に立つのなんて、どれくらいぶりだったかな」

……なんか、あれか。アカネさんは前世の記憶を持って漫画の世界に生まれ変わった人……いわゆる転生オリ主だから、俺達の暮らす日本のなんでもない様子が、懐かしく感じるようだ。下心丸出しで家に呼び出してから、ずっと機嫌が良さそう。

「今の貯蓄だと、ひとりにリソースをそそいだ方が良いハメよ。ボクのおすすめユニットは、君が頑なに呼び出さないあの強そうなヤツハメね」

「ああ～～ああ～～～あいつはいいの、戦わせないの、ゆっくりしててもらうの」

そりゃあ強いでしょうけどよ？　彼には眠っていてほしいのだ。起きてたら俺にダメージが入る。

そういうわけだから、

「アカネさんっ、俺の愛を受け取ってく……」

「はいはいはい!!　僕があいつを倒すッ!!」

「ええ～」

勢いよく立候補してきたのは、ボロ負けを喫したナイトさんだ。

「頼むセンタロー、やらせてくれ。本当の力の半分でも出せたら、今度こそやつを打倒して見せる」

「うーん、でも」

「負けっぱなしじゃ、自分の物語に帰れないよ」

赤い色の瞳で、まっすぐにこちらを射抜くナイトさん。

彼にやらせないのは、俺がアカネさんを贔屓しようとしていること以外にも、ちゃんと理由があるのだが。それは彼もわかっているはず。

そのうえで、そこまで言うのなら……。

「……いいッスよ。リベンジしにいきましょう！」

「よく言ってくれた！　良いヤツだな君！　一緒に風呂でも入って語り合おうぜ!!」

「わはは！　嫌です」

美少女にちんこついてるの見たくないしな！

その後、嫁……いやアカネさんの料理に舌鼓を打ち。嫁……アカネさんやナイトさんと、他愛ない世間話をして、食休みを終えたら。

外の世界は良い夜。普段の日常なら、家から出ることなんてせず、あとは布団にもぐるだけだけの、くらくて静かな時間。

もし、雷が落ちたりなんかしたら。それは凄烈に、目と耳に焼き付くことだろう。

▼

ナイトさんの結界魔法の中に、再度進入する。結界は、一般人は入れないようになっているらしく、見知らぬ他人を戦場に巻き込むことがない、すごい魔法だ。今後も頼りになりそう。

「いた……！」

ぼうっとそこに立っていた黒い影は、こちらを認め、再度動き出した。

肌がぴりつく。ふふ……これが殺気ってやつか！　俺も〝戦う者〟としての感覚が目覚めたようだな……。

あっ違う、ナイトさんがびりびり電気オーラを放ってるだけだった。

彼は懐から、小さな三角形の何か……キーホルダーみたいなものを取り出す。

しゃりん、と鈴が鳴るような音とともに、紫色の魔法陣（多分）が、ナイトさんの足元に現れる。

「――ラブリュス。セットアップだ」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』

「うわっ、えっ、英語だ！　英語コワイ！」

ばちばちっ！　と光が閃くと、さっきまでどこかの小学校の制服みたいなのを着ていたナイトさんは、軍服っぽい戦闘装備に早着替えしていた。手には斧……のようなデザインの、魔法のステッキ。

ふつうの服ではなく、バリアジャケットというらしい。斧のほうは、インテリジェントデバイスとかいうらしい。突然英語でしゃべって俺を威嚇してきたのは、あの斧に仕込まれたＡＩの音声だ。

ここまでが、さっきナイトさんに聞いた彼の設定に関する話。英語でしゃべるとは聞いてないけどな！

「英語じゃないぞ。ミッドチルダ語だ。……さあセンタロー、制限解除を」

ナイトさんがにらみを利かせている隙に、スマホのオリ主アプリを操作する。

登録済みユニット一覧から、ナイト・テスタロッサを選択し……制限解除の実行ボタンを。

エゴストーンを消費します。

はい。

……押した!!

「うお……」

ナイトさんを取り巻く雷のオーラが、激しさを増していく！

これは……すごいパワーだ。いやわからんけど、すごそう。ドキドキしながら、彼の小さな背中を見つめる。

やがて、一際強烈な閃光が目を焼き――、

……目を開けると。

「なるほど、こういう仕組みか。……これでもう、君にかっこ悪いところは見せないぜ、センタロー」

長身の金髪イケメンが、快活に笑っていた。

もどして。

「どうやらアニメ第三期ＳｔｒｉｋｅｒＳ時の姿に進化したようハメね。この作品のオリ主は、エタらないで連載が長続きすれば、途中でいきなり１０年ぶん歳を取るハメよ」

「せっかくかわいかったのに……」

「いくぞ、ラブリュスッ！」

「声も男性声優になっちゃって……」

いよいよ、決戦が始まった。

今のナイトさんはどう見ても強い。かわいさと引き換えに。

……だが、それでも勝てるのかどうか、俺には不安があった。理由は、最初の戦いの様子から予想できた、あの敵の特殊な能力にある。

「ええと、『設定開示（ステータスオープン）』……これかな」

ガチンコバトルでものすごく動きまくるシャドウオリ主を、なんとか一瞬スマホカメラに捉える。

オリ主アプリの機能で、やつの設定が一部表示された。

スキル開示レベル２…『????・????』

・西洋魔術師：ナギ・スプリングフィールド級　※制限中
・咸卦法
・仮契約：桜咲刹那（従者）
・仮契約：エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル（主人）
・所持アーティファクト：『雷神の鉄籠手（ヤールングレイプル）』

「あのガントレット？　があやしい」
先の戦いでは、あのシャドウが腕に、どこからか現れたガントレットを装着した途端、戦局が傾くことになった。
……やつのガントレットは、〝雷〟を、吸収してしまうのだ。そのうえ恐らく、それを自分のパワーにプラスする。
いま、あいつの設定を見て確信した。雷の魔法使いであるナイトさんは、明確に、バトルでの相性が悪い。
やっぱり、アカネさんの方が勝ち目あったんじゃないか。
「……」
いや。
今、一瞬だけ。目にも止まらぬ速度で戦っているはずのナイトさんと、たしかに目が

合った。
あの紅い瞳。子どもの姿のときと変わらない。これまでの日々でつくりあげた自分の力を、どこまでも信じている――そんな幼稚な、傲慢な、かっこいい目だ。
「いけえっ!!　ナイトさん！　いやもう、テスタロッサ一等空尉!!」
空中で、敵と武器をぶつけ合うテスタロッサ一等空尉さん。
俺を見下ろして、にっと笑ったのが、雷の閃光ではっきりと見えた。
さわやかイケメンスマイルだった。
「〝ブラスター4〟ッッ!!」
どん、とナイトさんの身体から紫色のもやもやが発生し、突風のように辺りに広がった。すごいパワーアップ感！
同時に、彼の手に持つ斧から、小型の支援機がいくつか飛び出す。
ひとりでに飛行するそれらは、強力なビームを敵に発射し――いや、光の縄だ。紫色の縄が、シャドウをがんじがらめに縛り付ける。敵は、空中で、動きのすべてを封じられた。
ナイトさんは地上に降り立ち、やつの真下に位置取り、武器の先をまっすぐ頭上に向けた。
魔法陣がいくつも出現し、ナイトさんとシャドウの間に整列する。あれらは〝砲身〟

なんだ、と直感した。
きっと、雷に頼らない、すごい攻撃の魔法を撃つ気だ……！
「吸収できるもんならしてみろ……！　どんな化け物になってくれるか見ものだッ!!」
いや、雷属性を撃つ気だ。メチャクチャ脳筋だった。
ナイトさんの斧が、ガッショガッショと荒ぶり、何かをぽろぽろと排出している。地面に転がるそれを見る。薬莢だった。
薬莢が切れたら、ナイトさんはどこからかもう1セット取り出して、追加で装填していた。入れ過ぎじゃね？
やがてびりびりと空気が震え、立ち並ぶ魔法陣がさらに強く発光し始める。
ナイトさんの纏うオーラが、斧の先に収束し――、
「トール……ハンマァァァ……ブレイカーーーッ!!!」
鼓膜破れたかと思った。轟音で。
シャドウは、影なのにわかるくらい黒焦げになって、炭になって消えていった。
「ふ。おーい！　見てたかセンタロー!!」
「ハ～メハメハメハメ！　やっぱり、完結作品のオリ主は強いニジねえ」
オリ主的なパワーを使い果たしたのか、子どもの姿に戻ってしまったナイトさんが、満面の笑みで駆け寄ってくる。かわいい。一生そのままでいてほしい。

「これで見直しただろ？　まあ、笑っちゃう肩書だけど――ちゃんと、最強なんだってさ！」

たぶん、雷属性が吸収できるとか、そんなの関係ない威力だったのだろう。

なにせ彼は、ＳＳＳＳＳランクなのだし。

3. I am the boon of my sood.

学校の昼休み時間。
いつもは教室で昼飯を済ませるところだが、今日は少し一人になりたかったので、文芸部の部室にやってきた。
総菜パンをほおばりながら、スマホをいじる。一番行儀の悪い食べ方だ。誰にも見られていないときにしかできない。
「……あー　評価入ってる。えっと……あー」
またマイナス評価だ。うまくいかないもんだな。
クソーッ！
「せっかくならもっと良い点ほしいよなあ。どうしたらいいんだろ」
「何か悩み事？」
「ギャアアッ!?」
耳元で突然声がして、驚く。イメージとしては、心臓と目玉が宇宙に飛んで行ったくらいビビった。

「せ、先輩？」
「こんにちは」
綺麗な容姿に、牛乳ビンの底みたいな野暮ったい眼鏡をかけた少女――俺の愛しの先輩が、いつの間にか真後ろに立っていた。
おかしいな。ドアから誰か入ってきたら気づくと思うんだけど……そこまでスマホ画面に夢中になっていたなんて。俺も現代人特有の病気にかかっちゃってるらしい。大人に叱られる。
しかし、えー、うそ、ドキドキする～。いい匂いする、えー。先輩お昼にここ来たりするんだ。へ～。
「ひとりで唸っていたけれど、何か悩み事かな」
「え!?　やさしい!?　先輩、もしかして俺のこと好きなん……」
「何か悩み事か？　と聞いただけだが。ないみたいだね、それはよかった」
クールな目つきをさらに冷ややかにして、俺を見下ろしてくる先輩。そのまますうーっと、幽霊みたいな静かさで動いて、対面の席に座った。んんー存在がかわいい。美人。すき。
……おっと、まてまて。今の俺にはアカネさんが……。
いやでも、どっちも好き。どうしよう……どっちかとしか結婚できないなんてつらい

ぜ……。え？　どっちとも結婚できない？　そんな。

先輩は、どうやら昼ご飯はもう済ませたのだろうか、カバンからはいつものように、本を一冊取り出した、

そのまま、静かにページを開く。

俺も、スマホの画面に視線を戻した。さっきまでの思考の続きをやろうとする……が。

今日はどうしてか、やたらと先輩に目が行ってしまう。気になってしまう。いやまあ、いつも頻繁にちらちら見てるんだが。

……先輩の顔って、なんか――。

「あ。……先輩、その本、よく読んでますね。もしかして、何回も読み返してます？」

先輩の読んでいる本は、これまでにも何度か見たと思う。一冊を読むのに時間をかけている、というわけではなく、日々変わっていく彼女の読み物のなかで、しかしあれだけは何回か手にしていた。はず。

先輩は、本の世界に向けていた視線を、一度、こちらに投げた。

「……。そうだよ。これは、私の思い出の本だから」

「へえ～」

「好きな男の子からプレゼントされたんだ」

「へぁ――――」

……はっ!?　いかん、失神していた。

首を軽く振り、再度先輩のようすを見る。

「もう一度言おうか。好きな男の子からプレゼントされたんだ」

「――――」

……はっ!?　いかん、失神していた。

こめかみを揉み、リンパ腺をマッサージし、再度先輩のほうに向きなおる。

「プレゼント。好きな男の子から」

……はっ!?　いかん、失神していた。

「だから千太郎くんが何度告白してきても、お断りだ。残念でした」

「そ、そんなバカな……っ!」

珍しくがっつり会話してくれると思ったら……!　衝撃の事実!

お、俺のほうが先に好きだったのに!（憶測）

「……」

本で口元は隠れていたけれど、先輩が今、少し笑ったような気がした。

むむむ。弄ばれているのだろうか。くっ、先輩にとって俺が単なる後輩Aだとしても、俺は、俺はよぉーっ!

「ね。良かったら、読んでみる？　なかなか面白いの。貸してあげるよ」
「え？　いいんですか」
思わぬ申し出と共に差し出された、一冊の本。こちらが受け取る仕草をすると、言葉通り、あっさりと手渡してくれた。
ハードカバーの重たい本で、読み応えがありそう。えっでも、先輩の好きな野郎からもらった大事なもんじゃないの。というか、そんな忌まわしき物品を、果たして純粋な気持ちで楽しめるかな。
表紙から視線を上げる。先輩が、こちらの反応をじっと見ていた。
いや、まあ、お話の良し悪しにそんなの関係ないか。
それに、最近は書く方で忙しくて、他人の書いた物語をあまり読んでいない。
せっかくだから、いろいろと参考にさせてもらおう。
「先輩、あざす！　参考にしますね」
「参考？」
「あっ、いや……なんでも！　へへへ」
▼
下校中。
ぼうっと歩いていると、あたりはもう暗くなっている。日の沈まないうちに帰るつも

りだったのだが、あっさりと夜だ。
「月綺麗だな〜」
お空のあれが、今日はやけに明るく、暗闇に映えてる。たぶん満月か、満月近くだ。
「ドゥフフ。月が綺麗ですねアカネさん。綺麗ですね〜月。いや〜月綺麗だな〜結婚してください」
ひとりでブツブツと、アカネさんの隙をついて結婚をする算段を立てながら歩く。
と、そんなとき。
「ようよう、キッズは毎日お勉強ご苦労さんハメねえ」
「うおっ!?　なんだお前か……」
突然変な声に話しかけられてビビった。どこから現れたんだこいつ。
「何か用?」
「君がいた学校の方から、シャドウオリ主の気配を感じるハメ〜。引き返すハメよ」
「え〜!?　嫌だなあ」
「シャドウオリ主は〝物語〟のある場所で暴れることが多いハメ。文芸部室と図書室がどうなってもいいと?」
「行きますよ、はいはい……」
別に面倒ってだけじゃなくて、単純に怖いんだよ。ケガしたり、死んだりするのがさ。

戦うのは俺じゃなくてオリ主のみんな、ってルールがなければ、絶対に現場には行かない。勇気を出して向かっているだけ褒めてほしいね。

肩で息をする頃になってようやく、とっくに正門の閉まった学校につく。

ここにシャドウがいるらしい。夜の学校というところは人が少ない。誰かを巻き込む懸念が小さく、現代バトルものには絶好のスポットだが……それでも、残業している先生たちや、夜間見回りのおじさんがいるはずだ。

ここは魔法使いのナイトさんを呼び出して、例によって結界魔法を使ってもらうか。

スマホを取り出し、オリ主アプリを起動する。

「ナイトさん、ナイトさん、っと」

「……あー、封時結界を使うハメ？　毎度いちいち既存ユニットばっかり呼び出すことになるのも、都合悪いな……」

「えーなに？　なんか黒幕っぽいこと言った？　ハメルン」

「なんでもないハメ。要は関係ない人間を巻き込まなければいいハメ？」

「そうだよー。そういうの大事だろ、道徳だよ、道徳」

「わかった、ボクに任せるハメ。むむむむ……ニジーーーッ!!!」

ハメルンが気持ちの悪い奇声を発し、極彩色に発光すると、それに呼応してか、いつかのようにスマホが光り出す。キモッ。まぶし。

「アプリに新機能、『モブ弾き結界』を実装しましたよ。君の要望に応える機能ハメ」
「え、ほんと!?　有能じゃん！」
「スタミナを消費することで、君がオリ主に使わせようとしたのと似たような結界魔法を展開できるハメ。あと、モブじゃない人間は弾けないから注意ハメ」
「モブじゃない人間って何？　あと人間に対してモブって言葉使うのやめない？」
「うるさいハメねえ。嫌なら使わなくてもいいんだぞ」
などと言ったやりとりの末、結界とやらを、ナイトさんの呼び出し無しで使うことができた。
あとはオリ主を誰か呼び出して、シャドウオリ主を倒せばいい。
……まあでも、結局ナイトさんかなあ。あの人万能だし、いろんな状況に対応しやすい。敵の能力が割れているなら、アカネさんに任せたいんだけど。
う～ん。誰を呼び出すか。
「さあ、ニジストーンを使って、新たなオリ主を呼び出すハメ！」
「あ、はい、結局そうなるわけね」
こいつ、やけに俺に新しいオリ主を召喚させようとしてくる。何を企んでるんだろうなあ。
逆らってもいいんだが。

……まあ、また頼りになる人が引けるかもしれないし、ニジストーンがあるならガチャ回すか。
「そうそう、それでいいハメ。人間はボクに大人しく従っておけばいいハメよ」
「もう態度があからさまですよね」
「さて、次の駒はいったい――ぎょべっ」
「？」
スマホをいじっていると、ハメルンの声が変な途切れ方をした。
ふとそちらを見る。
「え？」
そこでは。
いやに明るい月の下。黒い影が、いくつもの肉片と赤い血に濡れた地面の上で、静かに佇んでいた。
『■■■……■■■――!!!』
「う、うわあああっ!?　ハメルン……!?」
シャドウが絶叫する声にビビッて、尻もちをつく。
あの細切れの肉みたいなやつ。……ハメルンだ。ぬいぐるみに似せた身体から、リアルな赤い血がひろがっていて、気持ちが悪い。

そんな。い、いったい、どうすればいいんだ。

「ひっ……」

シャドウがこちらに目を向けている。手に握っているのは、ほんの小さな刃物……ナイフだ。

あれで殺されるのか!?　い、いやだ。

ぴちゃ、と一歩踏み出してくるそいつ。俺は思わず、自分の身をかばうように、腕を前に出した。

そして――、

あの、例の、やけに眩しい光。

『!?』

ぎん、と、金属がぶつかりあったような音がして、シャドウが後退する。

俺はそれを確認して、なんとか立ち上がった。

……まだ、動いてた。俺のスマホから、新しい仲間が呼び出されたんだ。そして、助けてくれた。

一体、どんなやつなんだ?　巻き起こる風に目を細め、じっと、その背中を見つめる。

真っ赤な、派手な服装をしていたその人は、ゆっくりと振り返った。

……こちらが見上げるほどの長身。赤銅色の肌に、老人のような白髪。鍛え上げられ

た鋼のような色の瞳。
そして、赤い外套……。
この人は。この男は、まさか――!!
「サーヴァ「うわあああ!」チャー。「うわあああ!」応じ参上した。……君が私のマス
「うわあああ!!」ええい、うるさいなあ!」
お、お前これ……
――オリ主じゃなくて、エ○ヤじゃん!!!
「なんで版権キャラがオリ主ガチャから出てくるの!?」
「さてねえ……とっても不思議ニジねえ……」
「お前のつくったガチャだろ!! あれ!? なんで生きてるの!?」
先ほどの血だまりは跡形もなく消え、いつものようにハメルンが、やや斜め後ろに浮いていた。
こわい。ゾンビかな?
「オリ主ごときにバラバラにされるなんて、屈辱ハメねえ。偽物の出涸らしの分際で」
「なんか機嫌悪いッスか……?」
「なるほど、敵はシャドウサーヴァントか。下がれマスター、迎撃する」
「あ! ちょっ……シャドウサーヴァントって言わないで!」

紅い人は、白と黒の双剣を手中に出現させ、シャドウオリ主に仕掛けていった。
何が何だかわからないけど、とにかくあの敵は危険そうだ。はやく倒してもらっちゃおう。
そうだ、相手の能力を見て、サポートを。スマホのカメラに敵の姿を収めて、アプリに解析させる。
すぐに出た。あの黒いのの設定は……

スキル開示レベル1：『??・??』
・直死の魔眼：遠野志貴級

「ちょく……し、の魔眼？　あ、知ってる知ってる」
あれだろ？　Ｆａｔｅのあの……ソシャゲのコラボイベントに出てくるキャラの……あれだろ？
俺は詳しいんだ。
「ッ、直死だと――」
こちらの声を聞いた弓の人が、双剣で敵を弾き飛ばし、すぐに近くに戻ってくる。やけに焦ったような表情だった。

「マスター、あれの視界に入るな。見られるだけでも良いものじゃない。……君から引き離す。魔力を回せ」

え？　ないよ、魔力。

「I am the bone of my sword――」

目の前の彼を中心に、熱風が吹き始めた。口にしているのは例のかっこいい英語。

え？　やだ、生で見れちゃうの！　憧れのあれを!?

「……So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS.」

「うおおお!!」

ごう、とうねる熱に、思わず目を閉じる。なんか例のBGMのイントロが聞こえてきてる気がする！

興奮で熱風のしんどさを撥ね退け、なんとか目を開く。そこには――

「あれ？」

誰もいなくなっていた。

エミなんとかも、シャドウもいなくなっている。

あれ？　どこにいった？

「特殊な空間を作るたぐいの魔術ハメね～。相手を引きずりこんだハメ」

「ええ？　俺は？　人の心象風景を観光したいのに！」

どうやら巻き込まないようにしてくれたらしい。そんなまっとうな気遣いが、少しさみしい。

俺はひとり、学校のグラウンドで、膝を抱えて座った。

お空のお月さまが、蒼くきれいに見えたのだった。

▼

少し移動して、芝生のあるところで寝そべり、うとうとしていると。

ぴしり、と音がして。空中に、亀裂のようなものが入っていた。

ぱりんと虚空が割れて、誰かが弾かれたように出てくる。もちろん、アー……ャーさんと、そして黒いやつだ、まだ決着はついていないらしい。アー……さんの表情は真剣なものだ。

ずざざ、と砂塵を巻き上げながら、俺の近くまで後退してくる。

すぐ勝つと思ったけど、意外に苦戦してるな。

「……世界をまるごと殺された。すまないマスター、やはりこの霊基では、万全とはいかないようだ」

「霊基とか言わないでくださいね」

「しかしひとつ、試したいことがある。――投影開始（トレースオン）」

彼は手の中に、小さな短刀を出現させた。

一目でただのナイフではないとわかる。……それは禍々しい、あるいは神秘的な空気を纏っていて。そして、刃が稲妻のような形をしていた。

あれは、たしか……？

『■■■……ア、ガ、ググ……』

固有結界を破ったシャドウオリ主は、しかし今、頭を抱えて苦しそうにうずくまっている。今なら、討ち取るチャンスのはずだ。

アーチ……アァ～さんは、いかなる魔術によってか、短刀の形をぐにょんと変化させ、一本の細い棒きれに変えた。

さらに、黒い洋弓を空いた手に作りだす。それで、短刀が変化したそれが、〝矢〟なのだとわかった。

それをつがえ、真っ直ぐにシャドウを狙う。

「チッ……センタロー、こいつじゃあのシャドウは倒しきれないハメ。他のオリ主と交代させるハメ」

「え？　なんで？」

「早くするハメ！」

「もう遅い」

冷たい言葉とともに、鋭い矢が、敵の胸に突き立った。

とたん、シャドウの苦しみかたが変わる。頭をおさえるのではなく、胸をかきむしるような仕草。

そして……常に身体を覆っているはずの黒い影が、まるで吹けば飛ぶ煙のように、もやもやと激しく揺れている。

「あ！　くそっ」

どうなるのか見守っているうちに、シャドウが、逃げた。

――うそだろ？　あれ、逃げたりするのかよ。それはダメだ、被害がでるかもしれない。

「私が追う。君はここで待っていなさい」

「あ……たのみます！」

それこそ風みたいな速さで、エミ……ヤア～さんは、敵を追いかけていった。

た、頼りになる～。かっこいい。

そうして。

しばらくぼうっと時間を潰していると、わりとすぐに赤い影が戻ってきた。

「すまない。逃げられたようだ」

「ええ～～～!?　ダメじゃん！」

「ああ……返す言葉もない」

あんまり申し訳なさそうじゃない、落ち着いた表情で彼はあっさりと言う。
うぐぐ。今まで召喚したオリ主のなかで、一番頼りになりそうなオリ主（？）なのに。
仕方ないか。彼が取り逃がしたのなら、たぶん、誰が追いかけてもダメだった。あれの被害者が出ないことを祈るしかないか……。
……いや、まだできることはある。仲間の誰かに、索敵のスキルを持っていないか聞いてみよう。
今後の方針を考えていると、エミィの姿が足元から消えかかってきた。どうやら呼び出し時間は終了らしい。
「ありがとうアーチアさん。おかげで助かりました」
例によって、すんでのところで命を助けられたので、お礼を言う。
また頼りになる仲間が増えた……ってことで、いいんだよな？　なんでオリ主ガチャから出てくるのかわからんけど……。
「……マスター」
「いや、マスターではないです」
「私を呼び出したのは君だろう。……なら、あれを呼び出したのは、誰だ？」
「え？」
うんと見上げたところにある顔は、けっこうマジというか、渋い表情だ。

いったい、彼は何を……？

「気を付けてくれ。この聖杯戦争は、どこかおかしい」

「あっ」

しゅん、と。赤い残像を目に残して、アーヤーさんは消えてしまった。

……。

胸に、ひとつのしこりが残る。

彼のいた虚空に向かって、俺は、ぼそりと呟いた。

「いや、聖杯戦争ではないです……」

4．　ランニング・デュエル!

ぱきょえーーーん!

という音。八角形・ほのかにオレンジ色のバリアが、俺達への攻撃を頑健に阻んで見せる。

「これでどうだ。ふんっ」

びょいん!

という音。彼の顔の辺りがぴかっと光り、途端、シャドウオリ主は〝十字架型〟の凄まじい爆風に巻き込まれ、どっかに吹き飛ばされていった。

……以上が今回のバトルである。そして、彼はそれらのことを、ポケットに手を入れて、そこに突っ立ったままやったのだ。

これでこそオリ主!

「シンさん、すげ〜!」

自分より若干背の低い、オーソドックスな学生服姿の少年に声援を送る。少年は振り向いて、頬を掻いてはにかんだ。

「ありがとう。かっこいいところ見せてくれ、なんて言われたの初めてだから。張り

切っちゃったみたい」
「ははは、は……あ、あれ……？」
視界がぐらりと傾く。というか、自分自身が傾いていた。
気が付くと、少年に肩を支えられている。どうやら、シンさんのパワーを解放するのに体力を持って行かれすぎたようだ。
「大丈夫？」
「ああ、うん……ハッ!?　人外の美貌」
ホ、ホモになる！
すぐそこに、銀髪赤目の絶世の美少年顔があった。オリ主って顔良くなりがち。
近くの地面に座らせてもらい、適当な会話を楽しむ。
「そうだ、巨大ロボットが必要だったら使ってくれよ。〝4号機〟を呼ぶ」
「え？　い、いいんスかそんなこと言って」
「いいと思うけど」
「巨大ロボットなんて言ったらファンが怒るのでは？」
「ああ、はい……」
といったような、どうでもいい内容を話している間に、シンさんの身体が消えかかってきた。タイムアップだ。

「時間か。千太郎くん、きっと重用してくれよ。僕のA．T．フィールドは引きこもりの部屋のドアくらい頑丈だからね」
「それって強いんスか、弱いんスか……?」
「あはは。じゃあね」
　下半身が消え去り、じきに頭まで消えるシンさんに、最後の言葉をかける。
「ところで、エヴァンゲリオン新劇場版ってあるじゃないですか。なんでもこの前〝きっちり完結した〟らしいですよ。知ってました?」
「……マジで!!??」
　素っ頓狂な声をあげ、シンさんはしゅっと消えていった。
　整った顔立ちを歪め、この世のものとは思えないほどヤバい驚愕の表情をしていた。
　今度レンタルしてきて鑑賞会してあげるか。あの感じだと、この世界から成仏してしまうかもしれないが……。

▼

「それでさあ、先輩が先輩で先輩でさ〜。このまえ本なんか貸してくれちゃってさあ。あとアカネさんがアカネさんでアカネさんなんだよね」
「ああーーー、ノイローゼになる」
　帰りのホームルームの直前、先生が今日の学校を締めてくれるのを待ちながら、隣の

席のやつと喋る。
空野（そらの）は、丸い眼鏡をくいっとやりながら、俺に迷惑そうな表情を向けた。迷惑がるな！
「ふん、僕のこの恋愛感情カウンターが算出したところ……そのふたりから君への恋愛好感度は、ゼロだな」
「ま～～～たまたぁ。そんなはずねーじゃん？　ああ見えて、ふたりは俺のこと、実は好きだと思う」
「ポジティブだねえ、夜見山。キモいねえ」
「そう褒めんなよ」
「――夜見山、おおい。いつものお願いしてもいいか？」
おしゃべりの途中くらいには教室に来ていた先生が、いつものように声をかけてくる。手渡そうとしているのは、授業やホームルームで既に配られたプリント類だ。
「ええ～～～!?」
「いやなの？」
「ぜんぜん！　了解ッス！」
「いつもありがとな」
このプリント類は、現在不登校中のクラスメイトに届けるものだ。その子の家は、俺

が帰り道で必ず通るところにある。もう慣れたもんだ。
　学生カバンを整頓しているうちに、ホームルームが終わる。クラスメイトどもに別れのあいさつをしつつ席を立つと、空野が声をかけてきた。
「なあ。もらったプリント、垣花（かきはな）さん家に持ってくのか？」
「そうだけど？」
「僕も一緒に行っていいかな」
「お？　いいけど、なんで」
「……クラスの集合写真、後ろに貼ってあるだろ？」
　教室のうしろの壁を見やる。４月ごろ、みんなが揃った日に、「この一年このクラスで頑張ろう！」なんて言って、熱心な副担任が撮ったやつ。クラスのみんなは放課後の時間をほんの１０分ほど削られ、総じて表情が不服そうなのが笑える写真だ。
　そこに、転入生の空野は写ってはいない。垣花は写っている。
「垣花さんの……顔が……めっちゃタイプ。お近づきになりたい」
「おお。なるほど」
　たしかにあの子はよく見ると、けっこう顔が良い。それはわかる。この色ボケ転校生はナンパを仕掛ける気らしい。眼鏡キャラのくせに。
　……不登校の子にかよ。さてはすごいなコイツ？

「いいぜ！　でもしつこくいくなよ？」
「わかってるって」

▼

それから二人して、垣花の家の前にやってきた。いろいろ寄り道なんぞしていたので、もう日没もすぐそこという時間帯になっていた。
「……うわ。おまえ、いい趣味してるな」
「ん？　あれ!?」
プリント類を取り出そうとしてかばんを持ち出すと、そこから、さっきまではなかった「ぬいぐるみの首」が飛び出ていた。
……ハメルンだ。なんだこいつ人の鞄に勝手に！　あと、こいつはぬいぐるみのふりをするには、いささか獣臭いのだ。魔法少女のマスコットキャラ気取りはやめてもらいたい。
気を取り直して、プリントを引っ張り出す。ハメルンの汚い毛がついてないといいんだけど。
「ポストに入れるのか？」
「ん？　うん。クラスメイトの顔見るの嫌そうだし、いつもそうしてるけど……」
「同級生なんだから、それじゃ薄情ってものだろ。貸してくれ」

郵便受けにプリントを入れようとすると、空野が文句をつけてきた。
まあ、たしかに。こんちわ～ぐらい言ってく方がいいか。
プリントを手渡すと、空野は……かちこちに固い動作で、垣花家のドア前に進んでいった。いや緊張してるのかい。
空野は汗を垂れ流しながら、非常にもたついた速度で、呼び鈴に手を伸ばしていく。
「……!　やっぱ無理!!　任せた、夜見山!」
「はあ?　ここまで来てかよう」
「じゃ!　また明日!」
「えっ帰るの!?　嘘でしょ」
根性無しの極み!?
空野はプリントを俺につき返し、なんと、脱兎のごとくこの場から去ってしまった。
なんのためにここまで来たんだか。これじゃ、垣花の住所がわかっただけじゃん。
けっこう仲良くなったけど、まだあいつのキャラが掴めないな……。
「ふう」
心の中で空野をひとしきり罵倒し、気を取り直してドアに意識を向ける。
呼び鈴に手を伸ばす。な、なるほど、たしかに緊張する。思えば、アポなしで人の家の呼び鈴を押すなんて、高校生になってからはしたことがない。スマホを親に買っても

らってからは、そういう機会はなくなっていた。

……きんこん。

指をしずかに沈めると、軽快な音が、心臓に重く響く。しばらく、息をのんで待つ。

やがて、かちゃりと、ドアに小さな隙間が開いた。

「はい」

か細い声。あまり耳にする機会がないので、垣花の声なのか、ご家族の声なのか、すぐにはわからなかった。

「えっと、1年5組の夜見山ですけど。垣花さん……和奈(わな)さんはいますか？　学校からのプリントを」

「……」

ドアが開いていく。

小柄で髪の長い、内気そうな印象を受ける少女が、そこから顔をのぞかせた。

「あ、こんばんは、垣花」

「え……!?」

「？　ああ、えっと。ほら、これ」

プリントお届け隊の俺を見て、少女は目を大きく見開いていた。やけに驚いたような顔だ。

紙束を差し出すと、それに目を通しもせず、こちらを見たまま受け取る。
え、何？
……もしかして、俺に惚れた？
「どうして、夜見山くんが、それを……」
「帰り道だから、実はいつも先生に頼まれててさ。あと、途中まで転校生の子が、垣花に会いたいって、一緒に来てたんだけどさ。なんか寸前で帰っちゃって――」
「っ!!」
ばたん。
鼻の先が、空間ではなく、壁になってしまった。
「オッ……」
……伊達に不登校じゃないな～。男子とか苦手なタイプかな。やっぱりそっとしておいた方がいいのかもしれん。
ていうか4月後半くらいからもう教室にいないのに、ちゃんと名前覚えられてたな。いいひとなのかも。空野じゃあないが、ほんとなら仲良くなりたいところだ。
まあ、今日は帰ろう。目的は果たせたんだ。
とりあえず明日は、空野にお説教だな。

日の入り時を経て、あたりはもう暗い。学生はさっさと帰宅するべきだ。
とはいえ、垣花の家まで通りすぎたら、あとはもう俺の家まではすぐそこだ。あっちが知っているかはわからないが、実のところ、俺と彼女は小学校から一緒のご近所さんである。クラスになったのは今年が初めてだけど。
今日は帰ったら何しようかな。
……あ、ていうか、ハメルン。こいつ何勝手に人のかばんに侵入してんだ。怒るぞ。
家路である狭い路地に入っていく。あたりには、人の姿はない。
「おいハメルン、おまえさ――うおっ!?」
その瞬間、びゅう、と風が耳を撫でた。
背後からの突風だった。思わず足を止め、別になにもないであろう後ろを振り返る。
もちろん、何もない。
前に向き直る。
「あっ」
狭い路地を、通せんぼする位置に。小さな〝黒い人影〟が佇んでいた。
……ああ～も～、周囲から人がいなくなったら、襲われると思った方が良いな。お約束になりつつある。
『……』

人影はこちらをじっと見つめていて、まだ手は出してこない。
体格からして、女性のシャドウオリ主、だろうか。しかし頭頂部には、二本の角のようなものが生えている。鬼……人外……？
いや、角だと思っていたものが、ぴんと動いた。うさぎの耳のような感じ。
例によってオリ主アプリを起動する。しかし、味方を呼び出すより先に、相手の情報に関心を持ってしまったのだった。

スキル開示レベル1：『????????』
・種族：ウマ娘
・??：ディープインパクト×サイレンススズカ

「ディープインパクト？　サイレン……ススス……？」
「おいおいまさか、令和育ちのキッズはディープも知らんハメか～？」
「むっ。若者が一番嫌なおっさんの言い回し」
衆人を気にしてか、だんまりを保っていたハメルンが、開口一番あざけるようなトーンで話しかけてきた。
「……知ってらあよ！　サメのパニック映画のタイトルだろ」

「さあ、はやくオリ主を召喚するハメ」
えっちがうの？　ハメルンは何も教えてくれない。
向こうのウマ娘さんが手を出してこないのを良いことに、落ち着いて、恒例のオリ主召喚をやる。
スマホが、ゲーミングパソコンみたいにケバケバしく光り――
「うわっ！　なに、ロボット？」
現れたのは、狭い路地にはあまり不釣り合いな、大きなメカ。空中に浮いているそれを、下からぽかんと見つめる。
「いや、あれはパワードスーツのたぐいハメ」
「え？」
「……？　あれ……おーい。誰だ？　俺を召喚したのは」
スマホカメラを向ける。

スキル開示レベル１：『織斑零斗』
・搭乗ＩＳ：『ダブルオーストライザー』

「あっ俺です、千太郎です、えっと、レイトさん」

「お？　よろしく」
よくよく見上げると、ゴツいメカの向こう側に、人がいた。なるほど、操縦者の姿がああもむき出しなのは、〝ロボットもの〟のイメージとは少し違う。
青年はぐるりと機体を旋回させ、やっとのことでこちらを向く。降りないと不便そう。
「で、あいつか。……ちんちくりんじゃないか。弱い者いじめになりやしないか？」
いかつい駆動音を鳴らして、レイトさんはウマ娘を威嚇する。たしかに、どうも戦う舞台が違う気がする。あんまり詳しくはないが、あちらのジャンルはたぶん、言うなれば〝スポーツ〟だ。
こっちのレイトさんは、機体にデカい剣とか装備していて、明らかにバトルメカである。一方的な勝負になりそうだ。
その方が、こっちとしては話が簡単でいいんだけど。
と、そんなふうに思っていたときだ。
「!!」
「うお、また……」
突風が吹きつけてきて、思わず顔をかばう。
……いない。シャドウの姿が、消えている。

「後ろだ、千太郎」
レイトさんの声に振り返ると、シャドウオリ主は、とっくに反対側にいた。
……狭い路地だ。つまりあいつは、俺達の、横を抜き去った。目に止まらないくらいの速さで。
汗が顎から落ちるくらいの緊張感で、敵を見つめる。
しかし影の彼女は――、こちらを襲うでもなく、首をくい、と傾けて。
路地の出口に向かって、今度は、見えるくらいの速さで駆けだした。
「えっ、逃げた……!?」
「いや」
ぷしゅ、ぎちぎち、がしゃ。いろんな音を出しながら、レイトさんが身に纏ったメカとともに地面に降りてくる。一気に路地が狭くなった。すいません、飛んでてください……。
「俺にはわかった。〝ついて来てみろ〟、って言ったんだよ。やつは自分の分野で勝負を持ちかけてきてる。つまり、〝駆け脚〟でだ」
「でも、シャドウは誰かや本を襲うことしかしないはずで……」
「ああなっても、根幹に刻まれた生き方ってのがあるんだろうさ」
言いながら、レイトさんは機体を何やら動かしている。

腕部にマウントされていたでっかい剣やら銃器やらが、光の粒になって消えていった。あれ、武器外しちゃうんですか。
「こいつは速度重視がコンセプトだ。速さで挑まれたら黙ってられねえ。――乗れ、千太郎」
「ん？」
「俺の背部にほら、取っ手があるだろ。そうそう、ブースターユニットのさあ……根元の方の……そう。掴め。助手席だ」
「いやいやいや」
一人乗りでしょ、それ。スペースは……たしかに、そこにしがみつけそうだけど。でも無理でしょ、バカなこと言ってんじゃないよ。
「大丈夫だって、バリアが守るから。安全性がＩＳの売りだから。はやくしろ」
▼
「あっしぬ、いましぬ」
「あの速さで小回りもきくかよ、おもしれえ……ッ!!」
現在、ゴツゴツの飛行メカとウマの娘さんが、人や車の消えた大通りを疾走中である。
レイトさんが加速していくたびに、取っ手を掴んでいる手が剥がれそうになり、いま、本気で死を覚悟している。なんで敵じゃなくて味方に死の恐怖を味わわされているん

ですか？

「曲がるぞ、つかまれ！」

やめて、と言っても遅い。ガードレールの向こうとは高低差がある道だ。車なら、この道からはみ出れば、いっかんの終わりである。

案の定。レイトさんの機体は、慣性に従って思い切り道路から逸れ、俺を投げ飛ばそうとしながらぐぐぐと向きを調整する。いま手を放すと死ぬのはわかりやすい。

「アカカカカ!!　死にかけてるおかげで夢力がガンガン上がってるハメ。この調子で頑張りたまメ」

「て、てめえハメルン！　離せ!!　重いんだよぬいぐるみもどきが!!!」

「ちょっ、やめるハメ！　やメ！」

肩からなんとかハメルンを引き剥がす。機体から弾きだされたケダモノは、夜の彼方に消えていった。

どうせ死なんだろあいつは。

「はやくおわれはやくおわれ」

しがみつきながら念仏を唱える。

驚くことに、少なくとも一般車よりは速く移動しているはずなのに、レイトさんはまだウマ娘に追いつけないようだった。ウマ娘ってそんなに速いのかな。それとも、向こ

うも〝オリ主〟だからか……。

ふたりの疾走者は夜を切り裂き、トンネルやら山道やらを通り抜け。やがて、高い位置に設けられたお誂え向きのロード……高速道路に入った。

「直線だ。ここで抜く!」

もうどうにでもなれ、と思いながら取っ手を掴む。

実際のところ、このスピードなら俺は、こうしてしがみついてもいられないはず。風の影響もそうでもない。バリアかなにかに守られているのは、本当らしい。

勇気を出して目を開くと、もうすぐそこに、ウマ娘の黒い影が見えた。しかし腕の振りも脚の振りも見えない。それほどの速さで動かしているからだ。身体ひとつでメカと張り合うなんて、敵ながらすさまじい。

だが、この勝負もここまでだ。レイトさんが、相手に並ぶ――!!

「なに!?」

抜いた。そう思ったときだ。

黒い影の走り屋は、ここにきて、さらにそのスピードをぐんと上げた。彼女は俺達に、前へ行くことを許さなかったのだ。

「あれでトップギアが入ってなかったってのか。この俺が、いつまでも女の尻をおっかけさせられるとはな」

「れ、レイトさん！　どうするんです？」
直線でも抜けなかった。追いかけっこは負けだ。
スタミナ切れを待って追い抜く。そして、武器を使って叩きのめす。それはできるだろう。でもそれって、たぶん〝勝ち〟じゃない。
それは、ここまで付き合ったからには、さすがに。
悔しくて、後味が悪い。
……決して追いつけない、黒い背中が、ぐんぐんと遠ざかっていく。
「……こうなったら、あれを使うしか……」
「あれって？」
「〝トランザムシステム〟だ。だが使えばおそらく、ドライブがオーバーロードして、この機体は空中分解待ったなしだろう」
「は？　絶対使わないで下さいね！」
「わかった。……トランザムッッ!!」
「おい!!!　ふざけるな!!!」
悔しいけどそこまでしろとは言ってねえ!!
きぃぃ、と耳を叩く駆動音。しがみついている部分も他のパーツも、機体のあちこちが紅く染まっていく。いかにも、後で壊れそうなパワーアップだ。

「〝成層圏までぶっちぎる〟。能力に制限がかかっていようが、それができなきゃ〝俺〟じゃねえッ!!」

視界がぐんと引っ張られていく感覚。周りの何もかもが、軌跡を残して後ろにすっとんでいく。

そうして、何もかもが速すぎる世界の中で。唯一俺達と同じ世界にいるものの背中が、はっきり見えた。

最後のデッドヒート。ゴールのないレースのゴールは、きっと彼女自身だ。

機体ががたがたと良くない音を鳴らすなか、俺とレイトさんは、限界まで前へ進む。

最後まで目を開けて、ふたりの背中を見続け、そして――、

▼

スクラップの山からなんとか上半身を引き抜き、辺りを見渡す。

「よう、生きてるか相棒」

パワードスーツが解除されてしまっているレイトさんが、快活な笑みを浮かべてそこにいた。

おかげさまで。おかげさまで死にかけましたね。

宣言通り、機体は哀れにも、派手にバラバラになってしまったようだ。でも俺は無傷。どういう仕組み？

レイトさんの差し伸べてくれた手を取り、立ち上がる。
すると、
「うっ!?」
まばたきをすると、目と鼻の先に、あのシャドウオリ主が立っていた。
で、ですよね。徒競走しただけだし、別に消えないですよね。
横目でレイトさんに助けを求めるも、彼は無表情でシャドウを見つめている。
心臓のでかい音を感じながら、俺は、黒い影に過ぎない彼女の顔を、間近で見た。
『引退レースとしては、そこそこ上等だった。……ありがとう』
「え?」
気が付くと、少女の影は消えていた。
……。
成仏……?
「最後はなんとか追い抜いたよ。お前のおかげさ、千太郎」
「俺、なにもしてないですけど」
「いてくれるだけでいいんだよ。そういうルールになってるらしい」
「はあ」
「しかし、なかなかのヤツだったな、あれは。気が合いそうだった」

気が合いそう、か。

……。

今まで倒してきたシャドウたちにも、物語がある、はずなんだよな。このレイトさんのように、個性があって、人格があったはず。

さっき。たしかに、シャドウだった少女の、〝顔〟が見えた。

こんなにも、誰かの先を走りきった、彼女の物語っていうのは。いったい、どんなお話だったのだろうか。

……読んで、みたいな。

「……。さて。そろそろ帰りますか、レイトさん。俺を元の場所に帰してください」

「えっ?」

えっ?

って、何?

「ハハッ、悪い、もうしばらくは直らねえよこれ。だってトランザムだよ?　……じゃ!」

しゅっ。と、スクラップの機体ごと、レイトさんは消えていった。

え?

えっ?

……。

トントンズトン……？

5.　シリーズもの

帰り道。

ちょうど家が見えるところまでたどり着いたところで、例によってシャドウに襲われる。このごろ近所で襲われること多くないか？

けれど問題はない。俺にはオリ主のみんながついているんだ。今回も、新しくガチャから呼び出した仲間によって助けられ、事なきを得た――。

とは、ならなかった。

いま、召喚したオリ主と一緒に、仲良くダバダバと走って逃げている。

「ちょっと！　は、はやくあれをやっつけてくださいよ!!　あんた〝国家錬金術師〟なんでしょ!?」

かっこいい青い軍服を、だらしなく前を開けて着崩している青年。表情には余裕があってつわものっぽいのに、すたこらさっさと俺に肩を並べている。

「ハハハ、オレの二つ名を教えてやろうか少年。『百薬の錬金術師』だ。お薬つくるのが専門なの。バトルとか苦手なの。しかも酒に存在が負けてる」

そんな軍服着ててガタイもいいのに！　全然インテリに見えないぞ！

「くそ……!!」

後ろから迫ってくる影を見やる。相手は人型だけど、シルエットからして何か変わった格好をしている。

鎧のような装甲を纏っていて、頭には独特な形のヘルメット。そして、必殺技のパンチやキックみたいなのを放ってくるたびに、やたらと体のあちこちがぴかぴか光り、テンションの高い電子音声みたいなのが聞こえてきてやかましい。おかげで攻撃を察知できている。

あれは……、

「あれは〝特撮ヒーローオリ主〟ハメ。なぜかまだ始まったばかりの、あるいは始まってもいない番組のヒーローに変身することがあるハメ。不思議ハメね」

「くっ……能力がわからないのにどうやって……!」

どうやって書けばいいんだ……!

まちがい。

どうやって勝てばいいんだ……!

「仕方ない。少年、これを投げつけろ」

国家錬金術師の青年、アルバートさんは、懐から取り出した何かを俺に手渡してきた。

液体の入ったフラスコだ。

「これは？」
「爆薬だよ」
「あああああああ!!」
穏やかな声色で穏やかじゃないことを言われ、必死でうしろの仮面怪人にそれを投げつけた。
ががん、と、音と光と衝撃に背中を押される。とんでもないものを手渡しするな！味方が俺を殺そうとしてくる。
爆発に敵がのみこまれた……はずなので、その隙に十字路の角を曲がり、壁に背を預けて身を隠す。
目だけを出して、敵の様子を覗いてみると。
そこには、爆煙を背に、かっこよくポーズを決めるシャドウの姿があった。
特撮のワンシーンになっちゃってるじゃないかよ！
「爆破は効かないときたか。なら……そうだ」
またしてもアルバートさんは、同様の薬液入りフラスコを手渡そうとしてきた。
自分で投げてくださいよ！　危ないなあ。
「これは投げるんじゃないんだよ。飲むやつだ。君が」
「えっ」

「よっと」
　気が付くと、俺はアルバートさんによって地面にひっくり返されていた。こ、これは、話に聞く軍隊格闘とかそういうやつでは。
　いてて、身体を地面に打った。
「痛って……もごご!?」
　そのまま鼻をつままれて、口にやばいものを流し込まれる。いかにも食用ではない、市販の薬よりもさらに変な味がした。
「けほっ、げほ。……なに飲ませたんスか!!」
「いやあ、アメストリス人を実験体にしたら怒られるからさァ。その点君なら安心だ。今年のレポートのネタになってくれ、少年」
「人でなし系オリ主だった……!」
　身体が熱くなっていく。骨が、筋肉が、ぎちぎちと異常を訴えている。これやばいやつじゃないかと思っても、もう飲んだ後だ。
「あ、あがが」
　視点の位置が高くなっていく。意識がもうろうとする。ふっとうした血液が全身を駆け巡っているようだ。
　すぐそこにいる、妙に嬉しそうな顔のアルバートさんを見下ろす。一緒に視界に入っ

た自分の身体は、腕やら脚やらが異常に太く、大きくなっていて、まるで自分の身体とは思えない。

飛びそうになる意識をなんとかかき集め、たすけてくれ、と言おうとした。

「ウギギ……オレ、プロテイン、ノム」

「筋肉語で話すようになる、と……」

何やら手帳にメモをしたためるアルバートさんの姿を見たあと、思考がどんどん、ぼやけていった。

▼

部屋の天井をしばらく見つめ、ため息をつく。今は、掛け布団を自分の上からどかすことすら、億劫だった。

あとでハメルンに聞いたところによると、あのシャドウオリ主は、筋肉ムキムキになった俺自身が、ボコボコに殴る蹴るなどして倒してしまったらしい。アルバートさんはそれをニヤニヤしながら眺めていたという。

そしてその代償として、いま、全身のひどい筋肉痛と発熱で、自室のベッドから動けない。アルバートさんはそんな俺を、自身が消えるまでニヤニヤしながら眺めていたという。

オリ主も良い人ばっかりじゃあないな。もうアルバートさんは呼び出してあげない

もんね。

「うう」

学校を休んで、いまはお昼を過ぎた頃だろうか。まだまだ動けそうにない。

しかし腹が減った。食べなきゃ治るものも治らないと思うので、なにかお腹に入れたいのだが。

こういうとき一人暮らし状態だとつらい。同居人として、ハメルンや、オリ主の誰かを数えられなくもないが……、ハメルンは病人を看てくれるような心のある生物ではないと思うし、オリ主のみんなを召喚するには体力（スタミナ）が必要だ。今は誰も呼べない。ランチを食いたければ、自分で用意するしかないのだ。

意を決して、身体を起こしにかかる。

のそり。

「いててて」

全身の筋肉と節々の痛み。じっと寝ていれば熱があること以外なんともないのだが、動くとこれが襲ってくる。当然、あたまもぼうっとするし、立ち上がるとさらにしんどい。

まあ、怪しい薬を飲まされて大変な目に遭った割には、全然まっとうな後遺症な気もする。咳とかもないし。痛いのは動くときだけだし。

菓子パンだかカップ麺だか冷凍食品でもお腹に入れて、またゆっくり休もう。
……このまま炊事場に辿り着けたらな！
「どうへえっ」
生まれたてのヤギくらいおぼつかない足取りでキッチンを目指すも、当然、すんなりいくことはなく。
げ、と心中で鳴いたときには、自分の身体は前のめりに床に倒れようとしていた。
訪れるだろう衝撃への覚悟で、ぐっと身体がこわばる。
「うう、飯食いたいだけなのになぜこんな目に……あれ？」
「大丈夫か？　千太郎くん」
いつのまにか、俺は床に倒れこむことなく、誰かの腕によって支えられていた。
助けてくれたのは……、
白い雪の王女さまみたいな外見のひと。アカネさんである。
「はわわ……」
こんなにも間近で顔を見せられたら、細やかな睫毛や瞳の中まで見えてしまいそうだ。めっちゃいい匂いもする。
呼吸の剣士だけあって、男子高校生の身体なんて腕一本で平然と助け上げてくれた。
見た目は王女さまだと思ったが、やったことは王子的だ。やだ、乙女になっちゃう……。

「あ、アカネさん。ていうか、あれっ、どうして？」
ゆっくりと立ち上がらせてもらってから、ようやく、当然の疑問が頭に浮かんだ。
アカネさんがこの家にいることは、俺がしょっちゅう呼び出してはアプローチしているので、珍しい光景ではない。けれど今日はオリ主アプリの機能を使う体力がなくて、呼び出していないはずだけど……？
「……。君のピンチに、その……オリ主のアプリ？　が反応して、私を実体化させたんだろう。ほら、私は君の、お気に入りのようだからな」
「マジかよ……そんな神機能が」
「こうなったら病人の看護くらいはしてやるが、あまり勘違いはしてくれるなよ」
アカネさんが俺の看病をしてくれるだと？　この世に生まれてきてよかった。
彼女はそっぽを向きながら話しているが、これはツンデレしぐさだろう。俺のことが異性として好きとみた。
あ、まあ、アカネさんの中身は男だから、異性として好きって言い方はおかしいのか。おかしいのか？
と、そこにいきなり、俺をとくに助けてはくれないがこの家には居着いているハメルンが、いつものように、認識外の領域から高速で眼前を通りすがった。シュッ。
「オリ主が勝手に出てくるのは中堅ユーザー向けの仕様ハメ。絆ポイントの高いオリ主

ほど、君のピンチに自発的に出現する確率が上がるようになって」

そこまで言うと、ハメルンはアカネさんのすらりと美しいおみ足に蹴り飛ばされ、家のどこかに姿を消した。

いいな。俺も蹴られたい。

「……さ、お腹すいてるんだろう。居間に行こう。……ほら、杖の代わり」

そっと白い手を差し出してくるアカネさん。表情をうかがうと、色白だからか、頬に朱がさしているように見える機会が多くて、かわいい。赤面体質……いや、あれはほんとうの赤面に違いないな。

自分があなたを支えてあげると、彼女は照れながら言っているのだ。これは……もはや夫婦の営みでは？

「えへへ……えへへへへ！」

「気持ち悪いなあ」

呆れ顔でそういうアカネさんの手は、雪属性らしく冷たい……と思いきや。やけにあたたかくて、なんともこちらをドギマギさせる温度なのだ。

やはり俺のことが好き……なのでは？

▼　両想いだな!!

アカネさんの手料理と手厚い看病により、気持ちだけは平時の5億倍くらい最高になった。とはいえ、それでいきなり完治、とはいかない。動くのがしんどいのは続いているので、じっと休むのを再開しようか。

そう思いつつも、また部屋に戻るのはどうにもおっくうで、居間のソファで、熱っぽい頭でぼうっとしていると。

俺のすぐそばに、アカネさんが腰かけてきた。いい匂いが鼻をくすぐる。

「どれ、どんなもんかな」

そう言って、アカネさんは手で、俺の首やら額やらをぺたぺた触ってきた。

おそらく手の甲をあてている。さっき繋いでもらった手は意外にあたたかかったけど、手の甲のほうはちょっとひんやりしていて、気持ちがよかった。

……ちょっと待って？　頭がぼやぼやしていてリアクションが遅れたが、いま俺は、すごいシチュエーションに身を置いているのでは？

そこに気が付くと、顔面に、アカネさんの触れてくる部分に、熱血がじわっと集まってくる。目の奥があつい。

「あれ。熱が上がっているようだが」

「ア、アカネさん。けっこんしてくれ……」

「男はおことわり。というか、言ってる場合か。そろそろ横になりなさい」

「ウス」
ちょうどソファにいるわけだから、あとは体を倒すだけだ。
アカネさんの言葉に物理的に押されるみたいに、俺は体を傾けていった。
「あ、おい。部屋に戻り……はあ。仕方のないやつだ」
目を閉じていると、誰かが、俺の身体をとんとんとリズムよく叩いてくれた。
昼近くまで眠っていたのに、またすぐ横になっても、簡単に眠りに入れないのでは。
そう思ってもいたけれど。
子供のころ、母親にそうやって寝かしつけられたのと同じように、あっという間に。
あの眠気がやってくるときの、気持ちいい海の中に、自分が沈んでいくような感覚がした。

▼

……。
……。
「ん？　この気配は――」
枕にしていたものが、みしり・びきびき、という音を出した。
「枕硬ッッ」
同時に、やわらかくてずっしりしていい感じだったそれが、急にコンクリートブロッ

クくらい硬くなって、夢心地が覚める。
「ん？　ああ、ごめん、つい筋肉が臨戦態勢に」
「あれ、アカネさん……うおお!?」
寝起きに見る景色は、謎の山影から見下ろしてくるアカネさんの顔だった。それの意味するところに気付き、頭の下の硬すぎ枕から、ばっと離れる。つまりは起き上がる。
このシチュエーションはまさかの……2回目の……。
この人、なんでこんなに膝枕してくれるの？　男心を弄ぶのが趣味？
「……。まだ寝ていていいよ。私は、少し外を見てくるから」
「え？」
アカネさんはラフな部屋着のまま、リビングを出ていく。その先は玄関くらいしか行くところはない。
いててて、とうめきながら後を追うと、もう彼女は玄関のドアを出るところだった。
ただし。
いつの間にかその服装は、学ランみたいな黒い詰襟に変わっていた。
そして、手には刀を携えて。
……戦いに行くのか。シャドウオリ主が近くにいるのか？
なら、いくら調子が悪いとはいえ、アカネさんの戦いを見届けないわけにはいかない。

部屋からスマホを持ち出し、家の外へ出る。
門扉から一歩踏み出そうとすると、人影が目の前を横切る。アカネさんが、既に刀を抜いて、何かを相手に動いていた。
「アカネさん！」
「!!　千太郎くん――」
アカネさんの姿が、なにか、丸太のような太いものに遮られる。
……腕、だった。これは腕だ。舗装された道路に、叩きつけられたそれが、派手にヒビを入れている。
自然、それを振るったものに、視線が行く。
……簡単に言えばそいつは、何かしらのアニメ・マンガで見たような、巨大なトカゲの化け物だった。体高は一階建ての家くらいあって、体長はもっとある。
印象に残る特徴と言えば。顔が、硬そうな殻に覆われていて、お面をしているみたいだった。
シャドウオリ主、ではなくない？
まっとうなモンスターじゃん！
「うわわ……な、なんだよ、こいつ」
「あー、あれはその、物語のやられ役であってオリ主ではないハメ。オリ主の実体化に

引っ張られて出てきたってところかねえ。……〝エネミー〟とでも呼ぶハメ、ソシャゲには付き物だし」
「シャドウより危険そうなんだが！」
「たしかに人とか無差別に襲いがちだけど、倒してもボクにはなんの得もないハメ。相手にするだけ無駄ハメ」
「こいつ……」
間違いなく、倒しておかないといけないやつである。一気にハメルンの話のたちが悪くなったな。
だが、どうみても人間の太刀打ちできる相手ではない。シャドウとの戦いに慣れてきたような気でいたが、今まで以上の恐れが、筋肉痛の身体をぶるぶると震わせてくる。いてて。
「〝雪の呼吸〟――」
怪物の腕の影から、無事だったアカネさんが、弾丸みたいなスピードで飛び出す。そうだ、俺には助けてくれるみんなが、アカネさんがいるじゃないか。
オリ主のみんななら、化け物退治だって！
「伍ノ型。『大雪山おろし』!!」
出た！　アカネさんの完全オリジナル技だ！

大きく跳びあがった彼女が全身をひねって刀を振るうと、そこから小さな雪崩のようなイメージが巻き起こり、それを伴ったアカネさんが突っ込んでいくことで、白い波が敵を飲み込んでいった。

実際のところ何が起こっているのかわからないが、とにかくすごいぜ！　雪崩とか吹雪くらいすごい密度の斬撃だった的なアレかな。

こころなしか寒い気がする。本当に雪景色の中にいる錯覚を覚えるような、凄まじい剣の技だったが……。

「……。ダメだな」

雪山のイメージから抜けだし、近くまで下がってきたアカネさんが、そうつぶやく。

目をこすってからもう一度あちらを見ると。言葉通り、あのお面トカゲはピンピンとしていて、そう効いていないようなそぶりでいた。

「大した相手じゃないけれど……ただ、あれを斬るには日輪刀（このカタナ）じゃだめだ」

「むむ、一体どうしたら……」

「新しいオリ主を召喚するハメ！」

「私の〝制限解除〟をしてくれ、千太郎くん」

「制限解除を？」

「うん。それで勝てるよ」

第三者の声を聞かなかったことにし、ポケットに入れていたスマホを掴む。
そういえば、まだアカネさんの力はちゃんと解放していない。これまでする機会がなかったから、召喚したときのままだ。
エゴストーンは……足りてる！　しこたま低評価くらって、いくつか中くらいの評価をもらった分だ！
巨大トカゲが、こちらにかかってこようと身体を沈めるのを見た。スマホを素早く操作する。
アカネさん、頼む……！
「俺の愛を受け取ってくれーーっ!!」
「いや、お気持ちは結構ですので……」
そうは言いつつ、たしかに、アカネさんは薄く、笑っていた。
少し振り返って、流し目でこちらを見ている。
そんな彼女の姿が、襲い来るエネミーを背景に、ゆっくりと変化していった。
黒い詰襟とスカートが、黒い着物と袴へ。
白い刀身に『悪鬼滅殺』と掘られた刀は、手の中から消えてしまい。代わりの一振りが腰元に。
「……の六十一。六杖光牢（りくじょうこうろう）」

何事かぼそりと呟くと、怪物の胴に、囲むように光の刃がいくつも突き刺さり、巨体を空中に縫い留めた。

その格好。剣士っぽくないその魔法みたいな技。もしかして、もしかして――

雪の妖精みたいだった彼女は、しゃりん、と刀を抜き去り。

まっすぐに切っ先を敵に向け、小さな声で唱えた。

「――融(と)かせ。『灼薙(しゃくなぎ)』」

ぶわ、とこちらに、熱気がやってくる。

アカネさんの持っていた刀は、じりじりと、見ている目が痛いくらいに、熱く熱く赤熱していて、夜の道をぼんやり照らしていた。

彼女はゆっくりとエネミーに近づき、その鍛冶途中みたいな色の刀を、仮面の顔に押し付けた。

『ぎいいいいいいいいいい』

「超痛そう……」

それは切断というより、溶断だ。

アカネさんの刀はじくじくとエネミーの身体に入り込み、熱し、溶かしていき。

……。巨大なモンスターは、身体を、ちょっと惨たらしく斬られ。死体は、光の粒になって消えていった。

彼女は結果として、制限解除をしてから何十秒も経たないうちに、敵を倒してしまったということだ。
「すげえ。かっけえ。お洒落」
冷めた刀を鞘に仕舞い、彼女がやってくる。
さっきまでアカネさんは、なんとか隊の剣士だったはずなのに。今は、なんとか十三隊の剣士に姿が変わっている。一体、これは……。
「シリーズものオリ主ハメね。ひとりのオリ主を使いまわして、あちこち転生させるやつ」
「そんなのあるんだ」
じゃあ、アカネさんは。
少なくとも二回、死んで生まれ変わっていて。その間ずっと、バトルものの主人公やってる、ってことか。
それって……。
この人、見た目は俺と同級生くらいに見えるけど。本当は、何年くらい、生きてるんだろ。
「千太郎くん。体調は平気？」
「え？　ああ、いやあ、おかげさまで、だいぶ」

「そう。それで……」
話しながら、こちらへ。
けっこう、いや、かなり近くまでやってきて、こっちの顔を覗き込んでくる。
「どうだったかな。私（オレ）の活躍」
それで、珍しく、何か期待したような質問を投げてきたものだから。
「それはもう。すっげえ格好良かったッス」
と、素直に返してみると。
アカネさんは、クール透明系美少女っぽい顔立ちで、
悪戯が成功した男の子みたいに、眉を吊り上げて、いっと歯を見せて、嬉しそうに笑ったのだった。